様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１４５０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７３０６８０

研究課題名（和文）ＰＤＤ女児・女子グループプログラムの立案・実践と応用行動分析的検証

研究課題名（英文）Effects of an Approach in Applied Behavior Analysis for PDD girls group

研究代表者
佐田久　真貴（Sadahisa, Maki）

兵庫教育大学・学校教育研究科（研究院）・准教授

研究者番号：１０４４１４７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、広汎性発達障害（PDD）女子を対象としたグループプログラムの臨床的実践数の積み上げと行動分析的検証を行うことが主たる目的である。参加者は、発達年齢に応じて2つのグループに分けられた。自身の特性や困り感などの自己理解と工夫・解決方法を見出すことを目標にプログラム内容が構成された。また、女子としての知識やスキル形成をねらう活動も取り入れた。参加者の満足度は高く、年齢があがるにつれ自身の障害特性について理解を深めていくことが、活動中の発言内容からも窺われた。個々の困り感には個別によるABA的介入が必要であるが、本グループは共通の関心事から共に工夫や解決策を考える場として機能した。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is continuation of the clinical practice of the group program for PDD girls and making the effect clear by ABA. The participant was separated according to development age by two groups. Program contents were constructed with the goal of characteristic of own and being troubled, and finding the self-understanding.
In addition, I adopted the activity for knowledge and the skill formation as the girl. The degree of satisfaction of the participant got the high score. Girls deepened understanding about their characteristic of the PDD. Approach of ABA is effective in a problem of the each girl. This group functioned as the place where girls consider a device and a countermeasure together.

研究分野：臨床心理学

キーワード：PDD女児・女子　グループ支援　応用行動分析

１．研究開始当初の背景

広汎性発達障害（以下、PDD と記す）の疫学的調査によると、その発生性比は 1.33 から 16.0 と幅があるが圧倒的に女児の発生率が少ないという見解が支持されている（Fombonne　E,2003）．女児・女子例の少なさゆえ、女子例への支援についての報告は男子事例に比べ少ない。申請者は、軽度発達障害児童のグループ活動を療育機関で８年間実践してきたが、毎年男児のみのグループであった。昨今の研究報告では、児童期・青年期の PDD 児・者に対し、行動分析・応用行動分析的アプローチを用いたグループ支援の有効性が唱えられ(井澤･井上ら, 2007)、自治体や民間団体主催のグループやデイ・ケアも展開されているようだが、女子の参加者が少ないことが報告されている(原､2011)。一方で、PDD 女児を持つ保護者との個別相談場面では、障害特性に関する質問や悩みに加えて、女性特有の問題（性や身だしなみについて等）に関する相談が増える。また、ある程度の子育てを経た保護者の体験談や実際を聞きたいという要望も多く、申請者は不定期ではあったが、グループワークを開催したこともあった。これらの傾向は、PDD 女児・女子が女性としての発達段階に応じた心理教育やアプローチを受けることの必要性と、保護者支援の一環として展開されるべき支援であることが示唆される。しかしながら、過去の研究では、攻撃性やひっこみ思案を示す女児への調査やアプローチに関する報告はいくつか見られるが（佐藤,2002、佐藤・佐藤,1998)、上述したように PDD 女児・女子のみのグループ支援に注目し、実践した研究は非常に少ない。神谷（2007）は、女子同士でスキルを獲得する機会を積極的に提供する必要性を論じている。この研究意義が認められ､20 年度より科研費の助成を受けてグループ支援を計画、開催することができた。

（注）研究遂行期間、DSM-５が刊行されたことにより、PDD は削除され、自閉症スペクトラム障害（ASD）に統合されることとなった。今後は、ASD が教育や福祉の領域でも使用されることになろうと思われるが、今回の研究報告書では、研究開始時に使用していた PDD を用いることとした。

２．研究の目的

本研究開始当初もグループ活動は継続中であったが、その症例数は非常に少なく本研究の目的であるストラテジーとタクティクスの関係を明らかにするには、実践事例の一層の積み上げが必須であった。

一方、応用行動分析の考え方は、従来の心理療法とは異なっており、本研究では発達段階や成長に応じた女児・女子特有の問題を、個人の「心の中の働き」であるとは考えずに、「個人と環境との相互作用」からとらえ、子どもに必要な行動レパートリーを増やしていくよう支援する。

３．研究の方法

（１）グループの概要

グループの名前を「あでりーくらぶ」とし、2～4 名の少人数制とした。対象は小学校高学年から高校生で、医療機関等において広汎性発達障害(PDD)、自閉症･高機能自閉症･AD/HD 等の診断を受けていること、あるいは、そのための経過観察中であることを条件として募集した。実施頻度は、中学～高校生グループで 1～2 か月に１回とし、小学～中学生グループは月 1～2 回とした。開催場所は H 大学発達心理臨床研究センターの１室であった。参加女児・女子たちが活動中、保護者が情報を交換したり話し合えたりするグループワークを併行で実施した。

（２）グループ参加者とスタッフ

①小学～中学生グループ

自閉症の診断を受けている女児 12 歳（以下、A 子とする）と PDD の診断を受けている女児 11 歳（以下、B 子とする）で、両者共に知的能力は平均であった。

また、本グループには 2 名の女児が加わってから計 3 回の活動を実施した。この 2 名は ASD の診断を受けている C 子と、知的発達障害の診断を受けている D 子である。

②中学～高校生グループ

アスペルガー障害の診断を受けている女児 15 歳（以下、E 子とする）と発達障害の疑いという説明を受けている女児 14 歳(以下、F 子とする）で、両者共に知的能力は平均～平均以上であった。

③スタッフについて

グループ活動を運営するメインスタッフ（報告者、以下 Th とする）と臨床心理学コースに在籍する女子大学院生 2 名が参加した。母親グループを開催する際は、臨床心理学コースに在籍する大学院生１名が担当した。スタッフトレーニングと活動ごとのスーパーヴァイズを行い、親子の言動や状況の把握をし、その情報をスタッフが共有した。

（３）グループ活動の内容と方法

グループ参加までに個別活動を実施し、グループの説明や録音等の記録についての説明をし、同意を得た。そのあと、アセスメントと目標設定を行った。それぞれの回数と活動内容は個々の状態に応じて設定した。

グループ活動のおおまかなプログラムは毎回ほぼ同じ流れとし（表 1)、さらに次回の内容を必ず予告するようにした。アセスメントにより、不安定になる傾向がある児に対しては、毎回 Th と本人・母親の 3 者面接を活動前後に実施した。活動前の面接では、参加者の当日の状態をアセスメントすること、母子から伝えたいことや質問を聴取し対応することを目的とした。活動後の面接では、活動内容と参加者の様子について母親に伝達すること、呈示したホームワークに母親の協

力を得るための説明、次回の日程確認等を目的とした。

表１　活動の流れ

親子面接	アセスメント
受付	名札をつけて準備
気分シート	1週間の気分を振り返る （高校生には短縮版 POMS）
学びの時間	障害特性や困り感に焦点をあてた内容で個別対応が中心（ABA 的介入）
エクササイズ	女性としての知識とスキルに焦点をあて、さらに女の子同士で“おしゃべり”を楽しむ場面になることを工夫した
茶話会	自由な構造とした
アンケート等	振り返りを行い、次回の活動内容を予告
保護者への伝達	必要時に実施

（４）分析方法

小学～中学生グループは計 10 セッション、中学～高校生グループは計 9 セッションを分析対象とした。

①対象児の言語行動の変化：中学～高校生グループにおけるターゲット言語行動を決定し、その分類基準に従って生起頻度の変化をみた。その分類基準を表 2 に示す。また、相手に対する言語行動を、「肯定的言語」と「否定的言語」「その他（質問等）」の 3 つに分類し、その割合を検証した。

表２　ターゲット言語行動の分類基準

言語行動	分類基準	具体例
自分自身	発達の特性以外の発言や記述	好きなアニメ、キャラクター、家族、学校など
相手のこと	グループに参加している相手についての発言や記述	相手への質問や意見など
障害特性について	発達障害に関連する発言や記述	障害、感覚など

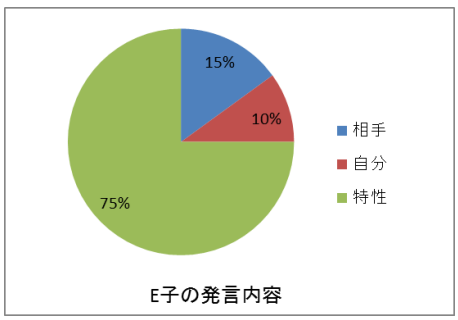
②怒り感情の変化：中学～高校生グループで実施したプログラム効果をみるため、感情についての質問紙を介入前後に実施した。

③参加後アンケート：2 つのグループで毎回のグループ参加後に自作アンケートを実施した。評価点の変化と自由記述の内容を評定した。

４．研究成果

（１）対象児の言語行動の変化について

中学～高校生グループ内の「学びの時間」では障害特性について学ぶ勉強会を実施した。勉強会では両者共に自分の特性について発言している。E 子の場合、アスペルガー障害者の経験談を読むと、「私も同じ」と発言することが多かった。自発的に特性について発言することはないが、勉強会の資料や Th の質問に答える形で、自身の特性について発言した。また、その際には隣の F 子を何度も見る行動があった。一方 F 子は「それはないかな」「ちょっとわかる」等の反応が多く、自身の困り感とは異なるものの理解はできるという反応だった。F 子はアセスメント期、自身の障害特性について「家族との会話でも、途中で意味がわからなくなることがある」「小学生の高学年になっても、『アレ取って』と言われても、アレが何かわからなかった」と説明した。セッション１でも、E 子に自己紹介をする時に同様の説明を行った。セッション８で F 子は、自閉症スペクトラムのレベル表を指さしながら「わたしは、この辺りだと思う。障害っていうレベルではないけど、ちょっとその特性があるって思うから」と表現した。その発言を聞いた E 子は、F 子よりも自閉症スペクトラムのレベルが高い部分を指さしながら「わたしはこの辺り」と表現した。セッション　で、ASD の脳のタイプについて学んだ時、E 子は「もっと詳しく自分の ASD のことを知りたい」と発言した。図１に、E 子と F 子のターゲット行動の割合を示す。自身の特性について語る割合が高いことがわかった。その頻度は回を重ねるごとに増加している。



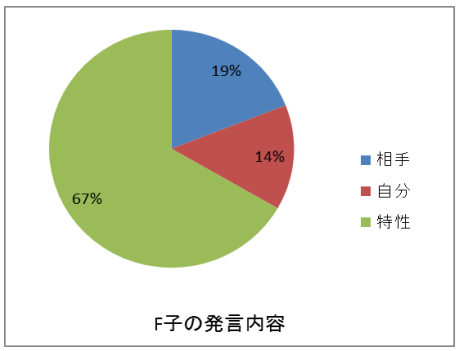


図１　中学～高校生グループのターゲット行動

最終セッションでは、F 子は「ここで資料を読むと、私って普通の方なんだなって思う」という発言があった。この頃の F 子の困り感は、イライラした時と何もすることがない時に爪をはがしてしまうという行動だった。そこで、個別介入を開始することとなった。心理教育と自己記録法を実施中である。

次に、相手に対する言語行動を「肯定的言語」「否定的言語」「その他（質問等）」に分類した。「その他」を省いて「肯定的言語」

と「否定的言語」の割合を検討したところ、F 子は「否定的言語」は全く生じておらず、E 子もほぼ「肯定的言語」であったことがわかった（図２）。相手を尊重するスキル、関心を示すスキルを有しており、本グループ場面はそれらのスキルを発揮できる場面であったことがうかがえる。

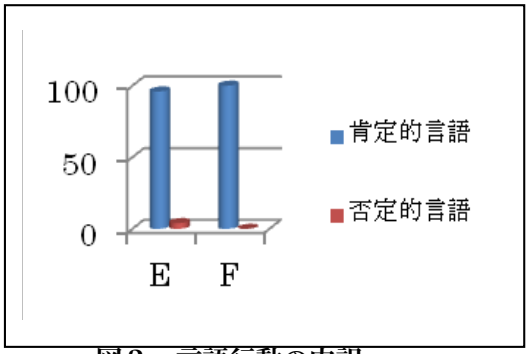


図２　言語行動の内訳

（２）中学～高校生グループでは、怒り感情の変容を検証した。その変化を図３に示す。F 子は「けっこう密かに怒っている」と自己評価をしていた。1 年後、その怒り得点が軽減されている結果となった。一方、E 子は 1 点のみ下がったが、変化があったとはいえない。しかしながら、日常生活の状況から怒り感情をコントロールしているエピソードが多く報告された。その方法が適切な方法であり、上手な方法であることを専門家やスタッフが本人へフィードバックすることは、自尊心の維持そして自己評価を高める結果になると思われる。

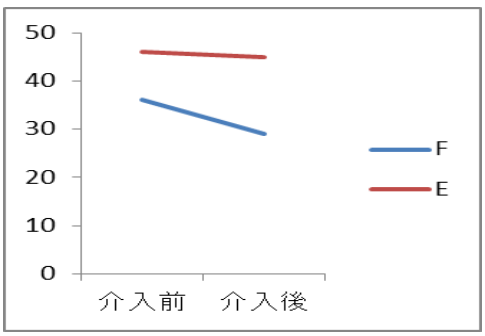


図３　怒り感情の変化

（３）満足度について

グループ参加後には毎回、自作アンケートで満足度を評定している。その結果を図４に示す。いずれのグループ、いずれの参加者からも高い評価を得ることができた。なお、D 子は、3 回のみの参加で終結したため、結果から除外した。本グループに参加することへの動機づけの高さは保護者の情報より推測できる。その期待の高さがバイアスとなり、評価が高くなっている可能性もあるが、C 子のように毎回の内容をゆっくり振り返りながらアンケートにチェックする参加者もある。彼女たちのニーズに合致するプログラム内容を構築していくこと、彼女たちの困り感を協働で解決していくことは、支援のストラテジーとタクティクスの適当なバランス効果が作用するといえる。

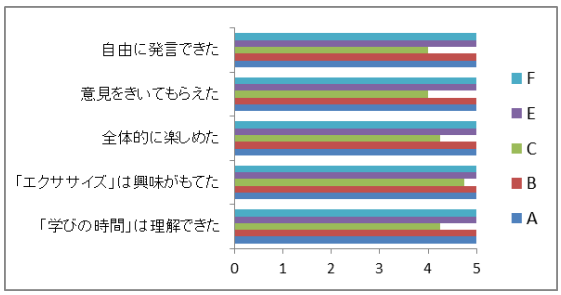


図４　毎グループ後アンケート（平均）

（４）小学～中学生グループの実践について

個々の事例の状況は省略するが、それぞれの障害特性についての理解は様々であるため、学びの時間では障害に関する用語は使用しないこととした。友人関係や勉強のこと、生活のこと等を語る場として機能するよう課題提示を行った。例えば、「気持ちのトレーニング」を「きもとれ」と名付け、感情や表情、認知、行動をとらえるトレーニングを行った。今後は、感覚特性の話題を取り入れて、障害や特性に関する内容を学ぶ場として機能させることを目標としたい。

（５）保護者グループについて

小学～中学生グループに併行して「あでりーままグループ」を実施した。障害の告知を受けた時期、その後の学校での支援や専門機関での支援はさまざまであるが、医療機関や専門機関での支援は途絶えていることは共通していた。また、小学校高学年からの友だち関係には似た悩みや課題を抱えていた。本グループで語り合えることが、子どもの特性の再確認をし、対応の仕方を考え直す機会となっていることが窺えた。毎回のグループ参加アンケート（満足度）を実施しており、概ね高い結果を得ることができた。

<引用文献>

① Fombonne, E.（2003）The prevalence of autism. Journal of the American Medical Association, 289.：87-89
② 井澤信三，井上雅彦，藤田継道（2007）自閉症支援における応用行動分析的アプローチの展望, 第 45 回日本特殊教育学会大会論文発表集，36
③ 原仁（2011）アスペルガー症候群―幼児期の診断と支援、そして小学校期のフォロー,そだちの科学 17,43-47
④ 佐藤容子（2002）仲間から拒否される学習障害児への社会的スキル訓練，行動療法研究 28(2)：111－122
⑤ 佐藤正二，佐藤容子，高山巌（1998）引っ込み思案児の社会的スキル訓練‐長期維持効果の検討‐, 行動療法研究 24(2)：

71－83
⑥ 神谷美里（2007）高機能広汎性発達障害女児のグループ活動の試み，小児の精神と神経 47(2)：115－122

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計　１　件）
① 佐田久真貴　応用行動分析に基づく PDD 女子グループプログラムの実践報告 2013　小児の精神と神経　53(3)，233-243
〔学会発表〕（計　4　件）
① 佐田久真貴　障害特性を「自己理解」していく過程における ASD 女の子グループの役割―診断説明のあとの支援から― 2015　第 113 回日本小児精神神経学会 東京大学（東京）
② Maki Sadahisa Experiences and Growth of an Asperger Syndrome (AS) Girl with her Friends of Group　The European Association for Behavioural and Cognitive Therapies（EABCT）Congress 2014.（Den Haag，Nederland）
③ 佐田久真貴 ASD 女児の仲間意識と行動変容について―女の子グループ参加者の発言内容の検証―　2014　日本特殊教育学会第 52 回　高知大学（高知）
④ Maki Sadahisa The effect of “Let’s Find Emotion” Program on Female Children with Asperger’s Disorder. The European Association for Behavioural and Cognitive Therapies（EABCT） Congress 2012.（Geneva，Swiss）

６．研究組織
(1)研究代表者
佐田久　真貴（SADAHISA MAKI）
兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授
研究者番号：１０４４１４７９
(2)研究分担者
なし。
(3)研究協力者
なし。